

美術館のある風景 (第11回)

展覧会のなりたち〈その五〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也



ヴァロトン展開会式前のプレス発表
(左：コジュヴァル館長)

6月14日、ようやく4年余りをかけて作り上げた「ヴァロトン—冷たい炎の画家」展が開幕にこぎつけました（～9月23日まで）。その前日13日は内覧会の日。実はこの日が私たち当事者にとっては「一番長い日」なのです。朝から、プレスの方々を招いて展覧会の趣旨説明と内覧会。今回は、ヴァロトンという一般にはあまり知名度が無い画家の回顧展にも拘らず120名近い参加者があり、期待度の高さを感じて嬉しくなりました。オルセー美術館の館長ギ・コジュヴァル自ら、熱のこもった解説をしてくれたので、その意気込みも伝わったことでしょう。

昼にはこの国際巡回展の第2会場だったアムステルダムゴッホ美術館館長一行、ローザンヌ市のヴァロトン財団の展覧会監修者たちとランチミーティング。さらに三菱地所・杉山社長とコジュヴァル館長の懇談会、役員たちの会場内覧などを経て午後、いよいよ開会式が始まりました。今年はスイスと日本の修交140周年ということもあり、ヴァロトンの生地・ローザンヌのあるヴォー州から代表団も来日。スイス、フランス、オランダなどから多くの美術館関係者が加わって大変華やかな開会セレモニーとなりました。冒頭の私と総合監修のコジュヴァル館長の挨拶に続き、スイスとフランスの両大使のスピーチがあったのも、二つの国の国籍を持ち異なる文化伝統の中を行き来した画家で、フランスでは「異邦人のナビ」と呼ばれたヴァロトンにふさわしい、異色の開会式でした。

夕方からは、招待者の方々の内覧会。知人・友人も含めてさまざまな人たちが来館。結構眼の肥えた方が多い。このときの皆さんの感想が、いつ

も気になるところです。とはいえ、今回の展覧会は多くの皆さんから高ポイントの感想をいただき、一安心。でも、こういった目利きの方々の反応が、必ずしも一般の来場者の増加に繋がらないことも多いので、そこは気をつけなければいけません……。

さらに夜はスイス大使館主催のレセプションを経て、ごく内輪の関係者たちだけの打ち上げ夕食会。オルセーの担当者たちも皆ニコニコ顔で酒盃を重ね、これまでの疲れも吹き飛んだ感じでした。こうした瞬間が展覧会開催の醍醐味かもしれません。

でも、学芸や展覧会マネジメント・スタッフにとってはとりあえず一段落でも、現場の管理・運営スタッフや広報・プロモーションチームにとってはこれからが本番です。相次ぐTVや雑誌の取材への対応、講演会やトークなど教育・普及のためのさまざまなイベント、会場の運営のセキュリティー業務などが延々と、展覧会終了時まで続きます。

実際、翌日以降、担当スタッフたちは再び目の回る忙しさとなりました……。私自身も、担当学芸員と共に、色々なメディアのインタビューに答えながら、ここ10年ほど習性となっている、来場者のブログやツイッターのチェックを毎夜遅くまで自宅のPCに向かってすることになります。来場者の生の声を知る上で、こういった作業は欠かせません。さあ、9月の終了までは長丁場ですが、この異色の画家の展覧会が日本の美術愛好家の皆さんにどのように受け留めてもらえるか、とてもワクワクします。